九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

大邱商業学校について ： 在朝鮮「内地人」学校の事例研究

稲葉, 継雄
九州大学大学院人間環境学研究院国際教育環境学講座 ： 教授 ： 比較教育文化論

https://doi.org/10.15017/17062

出版情報：大学院教育学研究紀要. 12, pp.1-18, 2010-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門
バージョン：
権利関係：

九州大学大学院教育学研究紀要，2009，第12号（通巻第55号），1-18
Res. Bull. Education, Kyushu U., Vol.12, 1-18

大邱商業学校について

―在朝鮮「内地人」学校の事例研究―

稲　葉　継　雄

はじめに

「大日本帝国の一地方都市大邱を全国ブランドにひろめたのは，大邱のリンゴ，邱商の甲子園出場，そして相撲の大邱山であろう」[1] と言われている。大邱リンゴは，戦前，皇室への献上品として有名であったし，今日もテグ（大邱）サグァとして韓国人の人口に膾炙している。大邱山は，第35代横綱双葉山の全盛期（1936～39年）に三役（最高位関脇）を務めた大邱出身の力士である。そして，本稿の主題たる大邱商業学校の野球部は，「半島中等野球界の雄」[2] という称号が常に冠せられる強豪で，1930年夏，甲子園に出場した。

大邱商業学校が教育史の上で注目されるのは，生徒の民族構成をきっちり半々とする文字どおりの「内鮮共学」のモデル校だったからである。「野球を中心に内鮮融和が理想的に実現されて居る大邱商業」[3] というのが朝鮮教育界における定評であり，それ故にこそ1930年４月，内鮮共学の中等学校としては初めて配属将校による軍事教練が実施されたのである。

しかし，朝鮮総督府や設置主体たる慶尚北道当局の目論見どおり「内鮮融和が理想的に実現されて居」たのか。それを検証することを念頭に置きながら大邱商業学校の歴史を素描することが本稿の目的である。

一．学校沿革

大邱商業学校の濫觴ともいうべき「実業夜学会」の設立計画が公になったのは1920年６月のことであった。当時の新聞に次のような記事がある。

大邱の教育機関としては普通学校小学校中学校農業学校高等普通学校高等女学校等ありて今の処内鮮人の子弟を教育するに何等不便を感ぜずと雖も大邱が純然たる商工業地として発展しあるを以て此際是非共実業学校建設の要あり然れども這は多額の経費を要し勿論一朝一夕にして実現せしむること不可能なれば先づ商工業者の子弟並に雇傭人を以て実業夜学会を開設し当分間有志者の醵金として之を維持せしめ機を見て実業学校に〇直す事となすべく目下府に於て計画の歩を進めつゝあり[4]（〇は判読不能，以下同じ）

このように1920年６月当時から，実業夜学をやがて実業学校にするという構想があり，1922年１月に至ってそれが具体化した。１月15日付の『京城日報』記事は次のとおりである。

大邱学校組合会議員及び大邱府協議会議員等は十一日午後一時より府庁樓上会議室に於て大邱商業学校創立の件に就き協議する処ありしが該商業学校は慶尚北道立を以て新築すべく決定し居れるも経費の都合に依り急に実現を見る能はざる状態なれば大邱府としては此際有志の寄附にて敷地其他を提供し十一年度を以て創立せんとするものなりと

1922年３月までに「有志の寄附にて敷地其他を提供」することができれば，4月からの新年度（大正11年度）には創立の見込みだったのである。しかし，結局それは実現せず，1922年５月現在，「曩に二十四万余円の予算で商業学校の設立に著手し本年度は七万余円の建築工費を以て来る十二(1923―稲葉註)年度学期から授業開始の予定で工事を取急ぎつゝある残余は十二年度内に於て工事の完成を期する筈である」[5] という状況であった。

1923年２月16日，大邱公立商業学校（５年制，学年定員100名）の設立が正式に認可され，4月16日，開校式に続いて授業が開始された。大邱中学校の庇を借りてのスタートであった。

1924年７月，大邱農業学校が郊外（達城郡寿城面）に移転した跡地（大邱府鳳山町）に建築中であった本館・講堂・寄宿舎などが落成したので，8月６日を期して新築校舎に移転した。

1927年，5年制商業学校の創立５年目を迎え，これを記念して10月９日，第１回運動会が行なわれた。「本年を以て五学年十学級を完成し今回はじめて第一回運動会を挙行」[6] したのである。

1928年３月，第１回卒業式が挙行され，52名（日本人24名，朝鮮人28名）が卒業した。入学時の実人員は不明であるが，定員の約半数が卒業したことになる。

1930年４月，大邱商業学校でも軍事教練が実施されることになった。男子中等学校に現役陸軍将校を配属しての軍事教練は，日本内地では1925年から，朝鮮では「内地人」学校に限って1926年から開始されていたが，大邱商業学校のそれは，次の新聞記事にあるように「内鮮共学の学校の嚆矢」という意味をもっていた。

大邱商業学校では中等学校に軍事教練を実施することになつて以来その可否について種々論議されてゐたが同校は現在々校生中半数は朝鮮人で純然たる内鮮共学で同一生徒に対し学科目に差別を附する訳には行かず内鮮融和の見地から見ても断然軍事教練を施すべきであるとしいよいよ本年の新学期から実現することゝなり軍事教官として現役将校一名（少佐）が配属されることになつたがこの実現は内鮮共学の学校の嚆矢であると同時にこれによつて他の学校にも普及されるものである[7]

同年８月，大邱商業野球部は，全国中等学校野球大会朝鮮予選に優勝し，甲子園へ駒を進めた。結果的にはこの１度きりであったが，大邱商業の甲子園出場は次のように評価されている。

野球部創設３年にして甲子園への覇権を握った大邱商業の出現は朝鮮中等球界の驚異の事実だ。
しかも晴れの舞台に米子中学を退け，強豪松山商業と組んで力戦し，よく初陣の名を辱めなかった戦績は半島ファンの血を沸き立たせた。
だが同校が今日の黄金時代を築き上げるまでの苦闘努力を知る者は，それが決して偶然の所産でない事を思うだろう。[8]

同じく1930年，大邱商業学校では生徒の実務見習（インターンシップ）が開始された。夏に続いて歳末にも実習生を派遣することになった経緯は次のとおりである。

大邱商業学校では今夏生徒を市内商店等に派遣，実務を見習はせたところ意外の好成績を挙げたので更に十六日から二十五日までの歳末期間を利用し五年生二十五名（うち朝鮮人生徒十八名）を同様実習生として派遣すべく大邱商工会議所が斡旋の労をとることゝなつた[9]

1931年１月，大邱商業学校史上最大のストライキが発生した。日本人生徒の朝鮮人生徒殴打～朝鮮人生徒の同盟休校～内鮮間の対立と展開したこの事件の，発端（１月22日）からほぼ解決（同31日）までの経過は次のとおりである。

二十二日大邱商業学校の五年生大島，若林，田中の三名は帰校途中同校四年生権重琪が自転車で帰宅中に出合ひ目礼のみで挙手の礼をしなかつた理由で廿三日同校講堂裏において鉄拳制裁を加へたことに端を発し廿六日午後から同校朝鮮人学生四，三，二年生は結束登校せず廿七日に至り事態は悪化して盟休に入つた出張から帰つたばかりの多賀校長は大に憂慮してこれが対策を講じてゐるが問題が内鮮人学生の感情にからまるデリケートな問題だけに一歩を誤れば第二の光州事件にならぬとも限らぬので緊急最善の方法を講ずることゝなり直ちに父兄をあつめて円満解決を図るべく道学務課の長野，軒原両道視学が出張して事件の調査をなしてゐる数日の中にあれだけの結束が出来たので思想的背景または使嗾者がありはしないかと道警察部でもその真相を確めるため探査の歩を進めてゐる[10]

大邱商業学校鮮人生徒の盟休事件突発以来学校および道学務当局は極度に狼狽し極力事件の外部に漏洩するを懼れて極秘に付し生徒鎮撫策に努めてゐるが学校当局から盟休生徒父兄に宛て二十八日生徒同伴で出校されたいとの通知に接した父兄側では僅に十七八名が出頭したのみでありしかもその中生徒を同伴したものは二三名に過ぎない状態であつた，盟休事件は益々粉(ママ)糾深刻化し拡大の傾向にあるが事件発生以来平穏であつた第一学年生徒もまた二十八日午後に至つて突如，動揺を来したので学校当局では背後に煽動者ありと睨み調査し第五学年級生徒徐五龍を無期停学の処分に付し断乎とした態度を持してゐる，目下学校当局は盟休生徒父兄側と対峙の形勢にあり，事態は漸く険悪化しつゝある矢先に二十九日朝には内地人側生徒が暴行者と目されてゐる若林外二名の生徒に

対して学校側が若し処分に出でた場合は内地人側生徒もまた結束して盟休を決行する決議文を多賀校長の手許に突き付け鮮人側の激昂に対して牽制の態度を持し事件は遂に内鮮人側生徒の対峙に化し俄然，急転回して鮮人側対学校当局対内地人生徒側の三巴状態の紛糾と化した，かゝる事態に対して学校当局並に学務当局の態度が注目されてゐる[11]

大邱商業学校の盟休事件は学校当局と父兄側と廿八，九の両日に亙り懇談協議に続き連日職員会議の結果さしもに強硬な態度を執つてゐた盟休生徒も三十日に到り弗々出席した……（中略）……三十日授業二時間後多賀校長は盟休生徒各学年別に訓示をする所あり三年級以下は十二時前帰宅し四年級生徒は校長訓示後更に校庭で協議する所があつたが父兄の意志を尊重し三十一日より登校する事に決定し一時半散会し数日に亙る同校の盟休も漸く解決の曙光を認むるに至り多分今三十一日頃から平常通り授業を開始する筈[12]

この事件は，2月4日から生徒全員が登校することによって表面上解決したが，内鮮生徒間の痼りはその後も残った。

1931年9月，満州事変が勃発するや，大邱商業学校生はこれに敏感に反応，11月29日，他校に先駆けて出動部隊への声援を送った。「廿六名の血判の決議」と題する新聞報道は次のとおりである。

大邱商業学校生徒二瓶敏外二十五名は「大邱商業熱血団」を組織し今回の満洲事件で出動中の我が将卒を声援する意味から

北満の風雲急を告げ戦禍の巷酷寒と闘ひ朔北の烈風第一線に立つ帝国干城の諸兵士の御奮闘を期待し我々第二国民協力一致以て国難に当らんことを

右決議す

と書し二十六名の署名血判したものを二十九日大邱憲兵分隊に持参，北満の我が出動軍人に贈るものでありますと宜敷く御取計らひ下さいといつて差出した，全鮮を通じて学生が斯様なことをしたのは初めてゞあり生徒の心理がかくまで愛国の血に燃えてゐることはまことに結構なことだと軍部では喜んでゐる[13]

大邱商業学校生徒の同様の行動は，翌1932年の10月にも「忠勇の血書」[14]，「血書を贈る赤誠学生」[15]の見出しで報じられており，大邱商業の日本人生徒が満州事変に積極対応したことを窺わせる。

一方，この当時，反体制運動に身を投じた大邱商業学校関係者も居た。1931年12月4日，歩兵第80連隊・大邱中学校などに反戦ビラを撒いた「アジビラ事件」に端を発した「プロ科学聯盟事件」の結末は次のとおりである。

十二月四日検挙後五十日間に亙つて，大邱署並に慶北警察部高等課に於て取調中の大邱檄文事件の副産物プロ科学聯盟事件は漸く一段落を告げ，一味九名を大邱地方法院検事局へ送致した，犯行

の内容は東京に本部をもつたプロ科学聯盟の朝鮮総支部を組織し『プロ科学』といふ機関誌を頒布して同盟休学，同盟罷業の実際指導に当つてゐたもので，此度送局される九名全部が大邱商業の卒業生と在学生である[16]

検事局送りとなった９名のうち３名が大邱商業学校卒業生，６名が同在学生であり，内鮮別では，卒業生中の２名が日本人，残り７名は朝鮮人であった。ほぼ時を同じくして発生した一連の血判運動と「プロ科学聯盟」事件は，日本軍国主義に対する大邱商業学校生の対照的な動きを示すものとして興味深い。

1933年６月２日付の『京城日報』は，「大邱商業学校ではこの度学制改正に従つて去る三月末総督府に支那語科新設の認可を申請中のところ三十日認可されたので同校では目下支那語講師の交渉を開始してゐる」と報じている。しかし，結局この「支那語」科は実現せず，後述するように，1935年度に至って「満州語」が開設されることになる。なお，当時の日本において支那語と満州語は同義語であった。

1934年６月，大邱商業学校史の一大汚点となる不祥事が発覚した。書記大町某による公金費消事件である。この事件は，大町の罷免，新書記浦川某の任命によって公的には一件落着したが，現・前職校長の弁償という副産物をもたらした。６月24日～８月８日の一連の新聞報道のうち主要なものを紹介しておこう。

最も実直でなければならぬ学校に公金費消の醜態を暴露し大きなセンセーションを巻起してゐる，即ち大邱高等普通学校書記山城誠一の一万数千円費消事件後数日を出でずしてまたまた大邱商業学校書記大町格（五六）の一万数千円公金横領事件が発覚大町は指名犯人として各地に捜査手配中[17]

大邱高普，大邱商業両校の書記の不祥事件突発するや土井高普校長岡田商業校長は謹慎すると共に善後策を講じてゐたが両校長とも二十三日朝全校員全生徒を講堂に集め不祥事件の責任を自分の不徳の致す処として声涙共に下る訓示をなし岡田商業校長は一万三千円の自己貯蓄の全額を投げ出し弁償する旨申出で直に学校金庫に通帳を納め土井高普校長も六千円の全財産を投げ出して費消金額の埋合はせを為すことになつた両校長のこの弁償金は教育界に身を投じて三十年間粒々辛苦して貯蓄したもので両氏とも裸一貫になつたわけで両校職員はもとより生徒は挙つて校長の美しい決断に涙して感激し両氏の高潔なる人格によつて汚名を除き教育界の美談として花を咲かしてゐる[18]

不正書記元大邱商業学校大町格事件は高木司法主任の手で連日取調べ中であるが妻女は共犯の疑ひなきものとして五日釈放し一方現木浦商業学校長多賀善介氏は前校長たりし関係で五日召喚当時の模様につき詳細訊問を受け取調べの関係で一日の滞在を懇請されたので同氏はそのまゝ滞邱し六日再び出頭し其他大邱商業職員三四名も，任意出頭の形式で召喚され大町を留置場から引き出し対決訊問されたが多賀氏は当時の責任関係もあるので一千円の弁償を高木司法主任に申出で同事件は

頗るデリケートな歩みをみせてゐる[19]

1935年４月，大邱商業学校に教科としての「満州語」が開設された。「商業学校では今春の卒業生から満洲国へ就職を求める者激増した事実並に日満経済ブロックの将来にかんがみ満洲語科設置の必要を感じ今年度からこれを実現担任教諭として東京外語学校出身の山内敏士氏をむかへて授業を開始した」[20] のである。ちなみに，総督府が全朝鮮の専門学校・中等学校において「支那語」を教えるよう勧奨したのは1938年度からであるが，大邱商業をはじめとする商業学校では総督府の「支那語」政策を先取りしていたのである。

1939年３月，50名の入学定員増（100名から150名へ）が認可され，1939年度新入生から３学級編成となった。内鮮半々という民族構成の原則はたてまえ上維持されたが，これ以後，朝鮮人生徒の比率が徐々に高まっていった。

1941年12月，第15回生の卒業式が挙行された。太平洋戦争勃発に伴う修業年限の３ヵ月短縮であった。この措置（12月卒業）は1944年まで継続され，大邱商業学校では第18回生までがその適用を受けた。

1943年５月，大邱商業学校生徒李相虎を首謀者とする独立運動組織「太極団」が摘発された。この事件については大邱鳳山町小学校同窓会誌に掲載された「大邱商業独立運動太極団事件顛末」に詳しいが，その冒頭，李相虎を紹介した部分は次のとおりである。

彼は邱商17回生，学年一の秀才。でも当時の邱商は教科の評点は百点のうち学科は五〇点。全てに操行五〇点を加えて評点された。もし操行零点なら学科満点でも落第する。これで学力で劣る内地人が相当救われた。李相虎は操行点不足で落第して四年生。

42年（昭17年）彼は遂に動き始めた。彼を中心に徐尚教，金相吉が志を同じくし民族の独立を求め，文字通り命を賭けて抗日の烽火をあげる。この団名を太極団―韓末国旗の太極旗から採り綱領，組織を定めた。[21]

「太極団」は，日本軍への入隊忌避，大東亜戦争非協力などにより朝鮮独立運動への参画を呼びかけ始めた段階，いわば芽の段階で摘まれてしまったが，内鮮共学のモデル校と目され皇民化教育が徹底して行なわれていた大邱商業学校の生徒を中核として「太極団」が組織されたことは，注目すべき出来事であった。

1945年３月，1941年以来の修業年限３ヵ月短縮がさらにエスカレートして１年短縮となり，第19回生が４学年修了で卒業した。第１回からの卒業生累計は，大邱商業学校『学校沿革』によれば1,567名であった。

1945年８月，日本の敗戦に伴い南朝鮮には米軍が進駐し，米軍政当局の管理下で10月18日，大邱商業学校の校長職は，1926年３月以来教諭として勤続していた李宗林に引き継がれた。大邱商業学校が韓国人学校として生まれ変わった瞬間であった。

二．教員の去就

1．校　長

1923年２月26日，大邱商業学校の設立認可は降りたものの，初代校長は暫く決まらなかった。２月27日付の『京城日報』によれば，「来る四月より開校する大邱公立商業学校々長以下の職員は道学務課長に於て夫々人選中なるが校長には目下九州の某商業学校長たる某氏と交渉中の処略其承諾を得たる由なれば不日其の確定を見るに到るべし」という状況であった。この「九州の某商業学校長たる某氏」が坂根久人を指しており，坂根は，同年５月11日付で大邱商業学校の校長兼教諭に任じられた。

坂根は，かつて釜山で教鞭を執ったことがあった。1910年４月，韓国初（1909年４月開校）の公立実業学校である釜山実業学校の教授となり，韓国併合後，「朝鮮教育令」の施行によって同校が釜山商業学校となってからも1919年７月まで同校教諭を務めたのである。大邱への招聘は，この釜山での経験が買われたものと思われる。

しかし，坂根の大邱商業学校長在任は２年弱で終わる。辞任の理由も不明で，「大邱公立商業学校長は或事情の為め病気静養と称して内地に引き揚げ」[22] たという新聞報道があるだけである。

坂根久人の内地引き揚げ後，後任の人選が急がれ，1925年４月10日，富永四方司が第２代校長に任命された。富永の本務は京城専修学校助教授（1919～21年度）～京城法学専門学校教授（1922～24年度）であったが（京城法学専門学校は京城専修学校の後身），京城法専教授時代，京城高等商業学校教授および仁川南商業学校教諭を兼任したことがあった。その意味で富永の大邱商業学校長就任は，妥当な人事だったのである。

富永は，大邱商業学校長を５年務めて1930年５月22日に退任，「京城高等商業の講師として赴任することになつた」[23]というが，ステイタスが講師であったためか，文書の上でこれを確認することはできない。

第３代校長多賀善介は，仁川商業専修学校～仁川南商業学校（1922年に校名変更）の教諭（1912～22年度），江景商業学校長（1922～29年度）を経て大邱商業学校長となった。山口県出身という点で初代校長坂根久人と，仁川南商業学校教諭を同時に務めたことがある点で第２代校長富永四方司と縁がある。

多賀善介の大邱在任も２年弱と短く，1932年３月，木浦商業学校長として転出した。

第４代校長岡田嘉高は，1911年広島高等師範学校を卒業し，日本各地の中等学校で教鞭を執った後1925年朝鮮に渡り，光州高等普通学校教諭となった。平教諭は1926年度までで，木浦商業学校の教諭兼校長事務取扱（1927年度）を経て校長街道を歩み始めた。その校長歴は，木浦商業学校長（1928～29年度）・公州高等普通学校長（1930～31年度，1930年度は忠清南道師範学校長も兼任）・大邱商業学校長（1932～1934年度）・木浦商業学校長（1935～39年度）と12年の長きにわたった。木浦商業学校長を２度務めたこと，多賀善介と同じく大邱商→木浦商の異動コースを辿ったことが注目される。1935年の時点ですでに，「多年校長として朝鮮の教育界に重きをなし其の功また少からざ

るものがある現に木浦公立商業の校長として令名が高い」[24] という評価を得ていた。

第５代校長近藤英三は，米コロンビア大学大学院修了（master of science）という，当時としては稀有な高学歴の持ち主である。米国から帰国後の1920年７月，私立京城高等商業学校の講師となり，同校の官立移管（1922年４月）後，教授に昇任した。英・米・独での在外研究（1923年１月～1925年８月）から帰朝後は，京城高商教授の傍ら朝鮮総督府視学官を兼任した。その後商業学校に転出し，木浦商業学校長（1930～31年度）・釜山第二商業学校長（1932～34年度，釜山第二商業学校は釜山実業学校～釜山商業学校の後身）・大邱商業学校長（1935～37年度）を歴任した。近藤英三にとって大邱商業学校は，教職歴の終点であった（退任時60歳）。

第６代校長村田稔は，1912年に広島高等商業学校を卒業し，広島商業・函館商業・青森商業などで商業学校教諭としての経験を積んだ。その後1924年12月，朝鮮に渡って咸興商業学校長に就任した。咸興在任は1938年３月まで13年３ヵ月に及んだが，当時の村田は，次のようにその教育方法，今日言うところのインターンシップを高く評価されていた。

実業教育の精神に就いて常に細心の注意を払ひ生徒をして実社会に活動せしむる上に何等の不安なからしめんため学校に於ては学科の外に実務を習得せしめ大いにその実績をあげつゝある，即ち夏冬或は学年末の休暇を利用して市内大商店に実習せしめ或は商品陳列所を利用して独立的実習に当らせるなど実に周到なる教養を施して居る，殊に年末の如きは府内各所に案内所を置き，道案内から商店の案内迄無料で奉仕し「咸商ボーイ」として今日では唯一の機関として一般から歓迎せられて居る，これなどは実に我が村田校長が子弟の将来を思ふ至誠の発露であらう[25]

1938年４月に大邱商業学校長となった村田は，1940年６月，突然辞任した。その辞め方が尋常でなかったことは，教頭であった谷常治が６月29日から７月９日まで大邱公立商業学校長事務取扱を命じられていることから推測される。なお村田稔は，6月28日付で勅任官を以て待遇されている。

第７代校長板倉邦介は，1915年に広島高等師範学校を出て福井商業学校に勤めていたが，1918年４月，龍山中学校の開校要員として朝鮮に招聘され，同校教諭となった。その後平壌高等女学校教諭（1924～33年度）・平壌高等普通学校教諭（1934年度）・鎮南浦商工学校長（1935～40年度）と北朝鮮勤務を経て1940年７月，大邱商業学校に赴任したのである。しかし，大邱商業学校長在任は２年に満たず，1942年３月，京城商業学校長として転出した。1941年入学の第19回生が，板倉校長の思い出を次のように記している。

板倉校長は我々の一年の時の校長で，丸顔にメガネをかけた温顔であったと記憶しております。太平洋戦争も始まったばかりで，連戦連勝のニュースに煽られていた頃でした。校長先生も温厚派は時代にそぐわなかったのか，翌年三月には黒の長靴のよく似合う岡校長が名馬「菊定号」に跨って颯爽と登場されました。それからは軍事教練が強化され，行軍と言いながら松根油材の採取に駆り出された思い出があります。[26]

京城商業学校は在朝鮮商業学校随一の名門であったが，板倉邦介の大邱から京城への異動は，栄転というよりも，第80連隊の基地大邱において「温厚派は時代にそぐわなかったのか」という辺りにその真相がありそうである。

大邱商業学校最後の日本人校長（第８代）岡久は，朝鮮での教歴を商業学校教員として一貫した。1924年以前は不明であるが，25年以降の経歴は，元山商業学校教諭（1925～31年度）・江景商業学校教諭（1932～34年度）・釜山第二商業学校教諭（1935～39年度）・馬山商業学校長（1939～41年度）・大邱商業学校長（1942～45年度）である。

岡久は，学科試験の成績に操行点を加味するという独特の評価方法を採用した校長として記憶されている。次の引用文は，ある韓国人の回想である。

植民地時代の差別待遇は，ある程度は当然だとしても，岡久校長の時に始まった英語，数学，国語等のあらゆる各科の試験成績の半分（100点満点の半分）だけを採点し，残り半分は所謂操行点数の半分で加算する精神主義採点法は無茶な採点法だったと思います。[27]

以上，歴代校長８名の経歴を見ると，富永四方司を除く７名は，大邱商業学校で初めて校長に昇任したのではなく，それ以前に校長経験があった。富永にしても，前職は京城法学専門学校教授であり，６等９級の高等（奏任）官であった。これは，朝鮮の商業教育界における大邱商業学校の地位を物語るものであろう。

ただ，歴代校長の在任期間は短い。最長が第２代富永四方司の５年１ヵ月で，平均２年９ヵ月に過ぎず，２年未満が３名（初代坂根久人・第３代多賀善介・第７代板倉邦介）も居たのである。前述したような内鮮生徒間のトラブル，職員の不祥事，地域社会や時代情勢の圧力など様々な要因が絡まった結果であろうが，村田稔が大邱赴任前に咸興商業学校長を13年３ヵ月も務めたこと，京畿商業学校の初代校長大村金治は20年にわたって勤続したことなどを想起すれば，大邱商業学校長の在任期間の短さは特徴的である。

2. 教　諭

校長の平均在任期間が短かったのに対して，教諭には長期勤続者がかなり居た。開校以来の教諭松浦益雄が８年（1923～31年度）勤続したのを基準として，このほか８年以上の勤続が確実な者を挙げれば次のとおりである。（括弧内は在任期間）

香月義夫（1923または24～35年度），金子隆吉（1925～36年度），小村俊（1925～36年度），国塩英夫（1926～34年度），後藤秀夫（1926～34年度），李宗林（1926～45年度），岩木健次（1927～39年度，以後不明），立木（旧姓山口）啓司（1927～45年度），谷常治（1930～41年度），児玉一雄（1931～39年度，以後不明），木村久雄（1932～39年度），森崎実寿（1935～43年度，以後不明）

彼らのうち何名かについて補足しておきたい。国塩英夫について1928年当時の大邱中学校在学生が，国塩先生が「週一回商業学校から来て商業の事を教えるのだが，殆どの生徒は受験勉強をして

聞いていなかった」[28] と述懐している。これによって，国塩が1928年当時から大邱中学校の教壇にも立っていたことが明らかである。ただし，「朝鮮総督府職員録」における国塩の大邱中学校教諭兼任は1931年度のみである。ついでに大邱中学校との縁として，上述の松浦益雄が大邱中学校教諭から大邱商業学校の開校に際して異動したことを附記しておく。

後藤秀夫は，「元小学校の教員をされたことがあり，それでオルガンを弾かれる」[29] という，商業学校教員としてはユニークなキャリアの持ち主であった。後藤と同じく元小学校訓導だったのが野中忠吾である。野中は，慶尚北道清道の華陽尋常小学校に在任中，文部省検定で書道教諭の資格を取り，1941年４月から大邱商業学校に勤務した。

李宗林は，京城法学専門学校の出身で，大邱商業学校では朝鮮語と法制を担当した。内鮮共学の大邱商業学校における最長勤続（19年５ヵ月）記録保持者で，日本敗戦後の1945年10月，韓国人学校としての大邱商業学校の初代校長に就任した。

岩木健次は，善隣商業学校卒業後朝鮮銀行に２年間勤めたが，一念発起して1924年，京城高等商業学校に入学した。ここで重要なのは，京城高商における兼任教授富永四方司と学生岩木健次の関係である。岩木は，1927年，京城高商を卒業して大邱商業教諭となったが，「邱商第二代校長の富永四方司先生は高商時代の恩師であり邱商では校長として温かく迎えて頂いた」[30] のである。

岩木健次と京城高商との縁はそれにとどまらなかった。岩木の大邱商業学校からの異動は，「斎藤先生のお力添えで京城公立女子実業学校にご転任に」[31] なったという。この「斎藤先生」とは，斎藤俊章のことである。斎藤俊章は，東京帝大の出身で，大邱商業学校教諭（1930年８月～1935年３月）の後，京城高等商業学校教官（1935年３月～助教授，1937年12月～教授）を務めていた。この京城高商教授としての斎藤が，岩木健次の京城への転出を斡旋したというのである。

立木啓司は，1927年から敗戦まで18年間，大邱商業学校に英語担当教諭として勤続した。邱商１回生が1928年３月の卒業であるから「卒業生全員が授業を受けている」[32] ことになる。

谷常治は，前述したように大邱商業学校教頭時代の1940年６月29日から７月９日まで校長事務取扱を務めた。そして1942年４月，鎮南浦商工学校長として転出した。

このほか大邱商業学校教諭の後校長になったことが確認される者は少数に過ぎないが，谷常治と同じく大邱商業学校の教頭から直接他校の校長となったのが津田藤一である。津田は，大邱商業の前の江景商業においてすでに教頭で，大邱商業でも６年間（1932～37年度）一貫して教頭を務め，咸興商業学校長として異動した。

これに対して坪井新次郎は，大邱商業学校教頭からさらに京畿商業教諭（1926～30年度，1928年から教頭）を経て，1931年元山商業学校の校長となった。ついでながら坪井は，「明治三十九年東京外国語学校英語科を卒業して和歌山中学校教諭となり次で大分県中津中学校教諭となつたが感ずる所があつて神戸湯浅商店に入り次で独立して日支貿易に従事したが，大正十一年再び教育界に返りて台北商業学校教諭となり大正十三年朝鮮に転出」[33] と，大邱赴任（1924＜大正13＞年）以前，波乱に富んだ経歴を経ている。

このほかユニークな元大邱商業学校教諭として山根（旧姓高橋）勇・藤巻義夫・末富幸博・関口

直治を紹介しておこう。

山根勇は，1927年，神戸高等商業学校を卒業して大邱商業学校教諭となったが，母校の大学（神戸商科大学）昇格を機に再び学窓に戻り，1932年の大学卒業後は満州の民間会社に勤めた。大邱商業在任は２年（1927年４月～1929年４月）に過ぎなかったが，満州の勤務先が大邱商業卒業生の就職先でもあったためか，大邱商業学校同窓会との関係はその後も続いた。

藤巻義夫と末富幸博は，広島の郷党間におけるリレー人事という点から注目される。藤巻は，1930年，広島高等工業学校を卒業して大邱商業学校教諭となり，多賀善介・岡田嘉高校長に仕えていたが，岡田校長在任中の書記の汚職事件を契機に1934年６月，辞任した。「前任書記宅に止宿していた藤巻義夫先生は，道義的責任をとられ郷里の広島市に帰られた」[34] のである。

この藤巻義夫の後釜として着任したのが末富幸博である。末富は，1931年の広島高師卒（すなわち岡田嘉高の20年後輩）で，1934年６月当時は広島・崇徳中学の教員であった。出身県は，岡田が長崎，藤巻が広島，末富が山口とそれぞれ異なるが，藤巻と末富の交替人事は，広島の地縁の産物であったと思われる。

関口直治は，東京商科大学（現，一橋大学）の出身で，大邱商業学校には６年（1937～42年度）在任し，1943年，民間の建設会社に移ったが，次の引用にあるように，太平洋戦争開始早々の1942（昭和17）年当時すでに日本の敗戦を予言したことで教え子に強烈な印象を残している。

昭和17年冬，私は関口先生をその寄宿先に訪ねた。進学の相談だった。……（中略）……

所が先生は肝心の話の前に思いもかけぬこと―日本が敗けると話し始められた。いついつ頃，グアムに，比島にと，地名を挙げて時系列的に虚空をみる冷徹な眼ざしで話される。

敗戦を口にするだけでブンなぐられて豚箱入りの時代，まさに衝撃戦慄の予言であった。我らの前途は如何に？想像もつかぬ悲劇の未来を思い慄然たる思いで凍てつく道を家路へ辿った。

今も不思議に思う。あの神の如き明察は何処から来たのか。関口先生は四修で東京商大。自由の学風の一橋は陸軍の学校とは異なる真理の淵叢であったのか？[35]

三．大邱商業学校の学校文化

大邱商業学校開校３年目を迎えんとする1925年３月の同校「学校便り」によれば，「本年四月第一学年に入学せしむる生徒数は内地人鮮人共に約五十名都合百名の定員に対し去る五日までに願書を受理したるものと一応受理して尚不備の点を整理するものとを合すれば約四百五十名に達する見込み」[36] であった。すなわち，入試競争率は，単純計算で4.5倍の高率であった。民族別には，日本人に比べて朝鮮人の競争率が，一貫して遙かに高かったといわれている。

このように，入学者は厳しい選抜を経て入学したが，その総数は不明である。第１～16回生は100名，第17～23回生は150名という入学定員を合計すると2,650名となり，実際には2,650＋α名が入学したものと思われる。

これに対して卒業者（第１～19回）は，公式の『学校沿革』によれば1,567名（民族別内訳は不明），『大邱商業学校同窓会誌』によれば1,651名（日本人747名，韓国人904名）[37] である。第19回までの入学定員合計2,050名に対する比率は76.4％，80.5％であり，いずれにしても転出・中退者がかなりいたことがわかる。

次に卒業生の就職先を見ると，1928年卒の第１回生（52名）の場合，官公署12名，金融組合11名，会社８名，銀行６名，自営４名などの順[38] であった。ところが２年後の第３回生は，「大邱商業学校卒業生五十八名中（一）官公署就職者二名（二）銀行会社農場商店就職者二十一名（三）上級学校入学生零（四）家事従事者三十五名」[39] と，官公署・金融組合が激減し，その分，自営（家事従事）や会社・銀行が増えている。

このように就職先に関して終始一貫した傾向は見られなかったが，大邱商業学校卒業生は，就職難の時代にも就職に苦労することはなかったようである。そのことは，次の新聞記事（1932年２月および1936年11月）から窺うことができる。

失業と就職難時代である今時卒業期に近付いた大邱公立商業学校長多賀善介氏は今回卒業生の求職周旋のため一月十九日来木浦から京城方面へ出張中三十日帰邱したが

> 今回卒業生七十八名中内地人四十一名中上級学校七名自営八名を除いた外二十六名は一人残さず既に売れ切れ朝鮮人三十七名は全部就職を希望するが今の処二十六名だけは定つてゐて残りも近いうちに大体消化できると思ふが晩くとも九月迄には残さずかたづけることが出来得る

といつてゐる尚同校卒業生のはけ口は従来は京城の一部と忠北，慶北道内位のものであつたが去年より販路は拡張し京城以南各地に進出し前途を楽観されてゐる[40]

この世智辛い御時世に就職難の風は何処を吹く？……とばかりの朗らかなニュース

大邱商業学校では早くも来春の卒業生青木五郎君が最難関といはれる興南の朝鮮窒素に入社決定したのを皮切りに鮮銀，漢銀，○○，朝鉄，三越，丁字屋等いたるところから続々申込みを受けて転（ママ）手古舞の状態である，以下恵比須顔の近藤校長の談

> 昨年度も生徒数より多い申込みを受けましたが今年もまたかういふ状態です，目下詮（ママ）衡又は推薦中で決定数は少いですが年末までには大部分就職決定となるでせう，商品のやうに○々と注文に応じるわけには行かぬので仲々詮（ママ）衡も骨が折れますよ[41]

上の引用から1930年まで，「従来は京城の一部と忠北，慶北道内位のものであつたが去年より販路は拡張し京城以南各地に進出」したことがわかるが，満州国建国後，彼らの就職先は満州にも広がった。1935年「春の卒業生から満洲国へ就職を求める者激増した」ことは先に見たとおりである（註20参照）。

一方，上級学校への進学は，卒業生が出始めて暫くは極めて低調で，1930年卒業（第３回）生中の進学者はゼロであった。しかし，進学希望者はかなりいたようである。たとえば1931年12月の状

況は次のとおりであった。

大邱商業学校の新卒業生は七十六名の見込みであるが上級学校への進学者は今の処七名でその他は卒業と同時に就職戦線に立つことになつたのでこの六十九名について就職運動に校長以下奔走してゐる[42]

この７名は翌年２月もそのままで，先の引用に「内地人四十一名中上級学校七名」とあるように全員日本人であった（註40参照）。

実際に進学した者の数は不明であるが，大邱商業学校卒業生の主要な進学先として京城高等商業学校があったことは事実である。これを最も端的に示すのが次の一文（大邱商業学校「恩師群像」中の「斎藤俊章先生」）である。

昭和四年三月東大経済学部卒業，昭和五年八月二十九日邱商教諭として着任，公民，商品，商事要項等担任，昭和十年三月京城高商助教授ご栄転のため退任された。‥‥‥（中略）‥‥‥先生は昭和十二年十二月，教授に昇進され岩木先生には邱商の上級校志望者を京城へと話しかけておられたようだった。既に九回の徳渕嘉生先輩は昭和十一年に無試入学，十一回の私も無試，西井勇君も見事合格（昭和十三年四月）一年の合併教室で先生から経済地理，二年では商業学を受講した。[43]

上の文中の「岩木先生」は，京城高等商業学校を卒業して1927年以来大邱商業学校教諭を務めていた岩木健次である。また，「無試入学」とは，大邱商業から京城高商へ校長推薦による無試験入学のルートがあったことを指す。斎藤俊章・岩木健次のみならず第２代校長富永四方司と第５代校長近藤英三も京城高商と縁があったことは前述したとおりであり，教諭小川吉次郎（在任1941年～？）も京城高商卒であったことを附言しておく。

大邱商業学校の学校文化を語るとき不可欠なのが運動部の活躍である。「はじめに」で述べたように野球部の甲子園出場が特筆大書されがちであるが，日本全国あるいは全朝鮮に名を轟かしたのは野球部だけではなかった。2001年10月，在日大邱商業学校同窓会掉尾全国大会に招かれた邱商総同窓会会長李鍾宙は，来賓挨拶の中で次のように述べている。

母校は体育方面にも，先輩方が在学していらっしゃった1930～40年代の名声をそのまま保っております。草創期陸上部，日本中学部１位，全鮮中等学校野球部優勝，庭球部日本遠征優勝，全鮮中学部のラグビー部優勝という華やかな伝統をそのまま継承し，野球部，ラグビー部は今日でも全国を制覇しております。[44]

「陸上部，日本中学部１位」というのは李鍾宙の誤認であろうと思われるが，1930年の全朝鮮陸上競技選手権の100mを当時の朝鮮新記録（11秒１）で制した表ムンチョル，1931年の全朝鮮中等学校

陸上競技大会の400mで優勝した柳龍夏など全朝鮮レベルの有力選手がいたことは事実である。

野球部は，1924年４月に創設されたが，財政不如意のためすぐ廃止され，1928年４月に再建された（多くの資料ではこれを「創設」としている）。そしてこの年から全国中等学校野球（甲子園）大会の朝鮮予選に出場し始め，翌1929年には早くも「最有力の優勝候補」と目されるまでになった。同年の朝鮮予選における大邱商業の下馬評は次のとおりである。

大邱商業が今日の黄金時代を築きあげた事は朝鮮球界にとって確かに驚異でなければならない。

昨夏の大会に彗星のように忽然として現われて大会一の年少投手・二瓶を擁し華々しいスタートを切った。同校は創立以来僅か１年の歴史を以て既に甲子園原頭への覇権を目指す優勝候補として自他共に許す堂々たる堅陣を誇るに至った。

しかし同校が今日まで長足の進歩を成して黄金時代を築きあげた裏面を知る者は，それが決して偶然の所産でない事に気がつくであろう。そこには古沢野球部長を中心として血の滲むような苦闘のあとが刻まれているのだ。

朝鮮では到底不可能といわれた冬季練習の新例を開いたのは実に同校なのだ。凍てついた霜柱を踏み砕き，寒風を衝きながら零下何度のグラウンドに降り立った，その意気，その熱は当然報いられなければいけない。……（中略）……けだし大邱商業は最有力の優勝候補チームといえよう。[45]

1930年，大邱商業野球部は，朝鮮代表として第16回全国中等学校野球優勝大会に出場，米子中に４対０で勝ち，松山商に２対４で敗れた。甲子園出場はこの年だけに終わったが，1928年から40年まで出場した朝鮮予選では，優勝１回，準優勝３回，通算26勝12敗の好成績であった。ここで留意すべきは次のような点である。第１は，チームの中心は日本人であったが，レギュラーの中に常に数人の朝鮮人がいたことである。ちなみに，甲子園出場メンバー中の３名は朝鮮人であった。第２に，「南鮮中等学校の雄大邱商業野球部には大邱府としての応援団があ」[46]った。大邱中学校野球部が「出ると負けの大中」[47]だったからか，大邱商業には大邱の町を挙げての応援体制があったのである。第３に，下関商業との定期戦をはじめ大邱商業は西日本各地のチームと交流があり，しばしば遠征もした。したがって，野球部員にとって内地は身近な存在であった。

庭球部は，最高学年が３年生であった1925年から頭角を現わし，翌1926年には，社会人を含む南鮮六道庭球大会で蔵田・金組が優勝した。蔵田・金コンビは，まさに内鮮共学の成果であった。そして，1930年には全朝鮮中等学校大会で団体優勝し，1931年には，金仁福・鄭達鎬組がついに全国制覇を達成した。金・鄭組の奮闘ぶりを報じた新聞記事は次のとおりである。

二日神戸における日本軟式聯盟関西支部，山手倶楽部合同主催の第七回全国中等学校庭球大会に出場した大邱商業金仁福・鄭達治(ママ)両選手は孤軍奮闘全国の強剛を悉く倒し遂に優勝の栄冠を獲得した全国庭球大会において朝鮮への優勝旗は最初の事とて大邱では両君の帰邱をまつて大々的歓迎会を催すことになつた[48]

先の引用（註44参照）にある「全鮮中学部のラグビー部優勝」については詳細を明らかにしえない。ただ，1931年１月に発生したストライキが「ラグビー部を中心とした韓・日学生差別待遇に抗拒する同盟休学」[49] だったことから，当時のラグビー部の中核に朝鮮人生徒がいたことを附言しておきたい。

このほか卓球部が，1928年の全朝鮮中等学校大会で団体・個人とも優勝したが，個人優勝者は許英明であった。

このように大邱商業学校の主要な運動部には必ず朝鮮人生徒が加わっており，陸上競技部や庭球部の名声を高からしめたのは主として朝鮮人部員たちであるといっても過言ではなかったのである。

大邱商業学校の校歌は次のとおりである。

一，紫映ゆる琵琶の山
　　姿は清し商道の
　理想をこゝに極めんと
　　集ふ邱商健男子

二，力をあわせ　たゆみなく
　　自啓の精進一筋に
　智徳を磨き身を鍛う
　　心は日々に新たなり

三，天与の使命もろともに
　　富国の道をふみさくみ
　生けるかぎりをさゝげたる
　　雄図を胸にいざゆかむ

この歌詞は，純粋に商業学校生徒の生き方を謳っており，軍国主義的な臭いはない。しかし，とくに満州事変以後，大邱商業学校も軍国主義から自由でありえなかったことは言うまでもない。これに関する記述は『大邱商業学校同窓会誌』の随所に見られるが，「太平洋戦争が始まった翌年に入学した私達が最初に教わったのは，ゲートルの巻き方であった。学生生活は軍隊式で挨拶から制裁迄すべて軍人の真似をして過ごした時代である」[50] という第20回生の証言が象徴的である。

おわりに

大邱商業学校は，内鮮共学モデル校の期待を担って創立され，実際，一定の成果を挙げた。内鮮混合チームであった野球部の甲子園出場は，その絶頂であったと見てよかろう。しかし，そのよう

な大邱商業学校において，内鮮生徒間のトラブルに起因する大規模な同盟休校が発生したことがあり，独立運動組織「太極団」の中核分子も出た。「内鮮一体」は，所詮画餅だったのである。

1945年10月，李宗林を校長とする韓国人学校となった大邱商業学校は，1年後の1946年9月，6年制の大邱商業中学校に改編され，その後大邱商業高校～大邱商業情報高校を経て，現在は大邱商苑高校となっている。商業高校時代から大邱南郊に移転しており，3年制の男女共学校である。なお，大邱商業学校の旧校舎のうち1924年建立の講堂が，2001年12月，韓国政府（文化財庁）によって「近代建築物登録文化財」に指定された。

戦後，日本で再建された同窓会は，「在日大邱商業学校同窓会」と「在日」を冠した点で特異である。これは，彼らが結成当初から日韓の同窓会交流を念頭に置いていたからに他ならない。1973年，母校創立50周年を記念して，引き揚げ後初の母校訪問団（100名）の訪韓が実現し，記念品として大理石製の時計塔が寄贈された。この時計塔は，学校移転に伴って移築され，今も存在を保っている。

1973年以後も定期・不定期の日韓交流が続けられていたが，在日大邱商業学校同窓会は，会員の高齢化に抗し難く，2001年10月の掉尾全国大会の開催，2002年4月の『大邱商業学校同窓会誌』掉尾号（第13号）の発行を以て解散した。

〔註〕

（1）『大邱鳳山町公立尋常小学校同窓会誌　育鳳』第14号　1995年7月　p.13
（2）『京城日報』1938年10月13日付
（3）『朝鮮民報』1931年1月28日付
（4）『京城日報』1920年6月8日付
（5）同　上　1922年5月22日付
（6）同　上　1927年10月9日付
（7）同　上　1930年4月18日付
（8）西脇良朋『朝鮮中等学校野球史』私家本　2000年　p.211
（9）『京城日報』1930年12月4日付
(10) 同　上　1931年1月29日付
(11) 『朝鮮民報』1931年1月30日付
(12) 『大邱日報』1931年1月31日付
(13) 『京城日報』1931年12月2日付
(14) 同　上　1932年10月5日付
(15) 同　上　1932年10月6日付
(16) 同　上　1932年1月23日付
(17) 同　上　1934年6月24日付

(18)　同　上　1934年６月25日付
(19)　同　上　1934年８月８日付
(20)　同　上　1935年５月５日付
(21)『育鳳』第10号　1993年６月　p.16
(22)『京城日報』1925年３月１日付
(23)　同　上　1930年５月23日付
(24)　阿部薫編『朝鮮功労者銘鑑』民衆時論社　1935年　p.761
(25)　同　上　p.794
(26)『大邱商業学校同窓会誌』第９号　1998年上期　p.35
(27)　同　上　掉尾号　2002年　pp.72-73
(28)『大邱中学校九州同窓会会誌　たいちゅう』第27号　2006年　p.24
(29)『大邱商業学校同窓会誌』掉尾号　p.54
(30)　同　上　p.57
(31)　同　上　p.59
(32)『育鳳』第11号　1994年１月　p.20
(33)『朝鮮功労者銘鑑』p.351
(34)『大邱商業学校同窓会誌』掉尾号　pp.55-56
(35)『育鳳』第17号　1997年１月　p.7
(36)『京城日報』1925年３月７日付
(37)『大邱商業学校同窓会誌』第12号　2001年　p.7
(38)　同　上　第９号　pp.37-38
(39)『大邱日報』1930年５月31日付
(40)『京城日報』1932年２月６日付
(41)　同　上　1936年11月10日付
(42)　同　上　1931年12月４日付
(43)『大邱商業学校同窓会誌』掉尾号　p.58
(44)　同　上　p.34
(45)『朝鮮中等学校野球史』pp.116-117
(46)『京城日報』1930年２月７日付
(47)『たいちゅう』第20号　1999年　p.3
(48)『京城日報』1931年８月５日付
(49)『一九二三年起　学校沿革』大邱商業学校（手書き文書）
(50)『大邱商業学校同窓会誌』第９号　p.38

The Taegu(Taikyū) Commercial School: A Case Study of a "Naichijin" School in Colonial Korea

Tsugio INABA

Taegu (J. Taikyū) Commercial School, with the ethnic composition of its student body being one-half Japanese and one-half Korean, was founded in 1923 as a model of the coeducation of the Japanese and the Koreans in colonial Korea (*naisen kyōgaku*). By 1930, when its baseball team participated in the national middle school baseball tournament as the representative of colonial Korea, its reputation as the "ideal achiever of harmony between Japanese and Koreans (*naisen yūwa*) through its emphasis on baseball" was established in the educational sphere of colonial Korea.

The goal of this article is to verify the reality of the "ideal achievement of *naisen kyōgaku*" by tracing the history of Taegu Commercial School. The study concludes that the *naisen kyōgaku* system of the school produced a certain degree of achievement, as demonstrated by the appearance of its ethnically mixed baseball team in the national tournament. Starting in April 1930, military drill was provided to its students by an army officer. This made the school the first *naisen kyōgaku* middle school whose Korean students became the object of military drill, as a result of the recognition of the school's achievement of *naisen yūwa*. Military drills had been provided in Japanese schools from April 1926.

Nevertheless, Taegu Commercial School experienced a full-scale school strike due to conflicts between Japanese and Korean students. It also saw its students becoming the leaders of "T'aegŭktan," an independent movement organization. The attempt of Japanese education bureaucrats to realize *naisen ittai* (oneness of Japan and colonial Korea) at Taegu Commercial School was a failure after all.